

中学受験の6年生は、多く親御さんの目から見ると、成績が伸びなかったり、やる気がないように見えたり、するものです。

これは、彼らの現時点における、肉体的・精神的能力を過大に評価している（要求している）前提から生じるものです。端的に言えば、「親の欲目」とも言えます。

彼らは学校が終わった後、週に何日も塾に通い、何時間もの授業を受け、宿題なども出されるわけです。彼らにしてみれば、肉体的能力のギリギリまで勉強しているともいえるわけです。ブラック企業で朝から夜（夜中）まで働いているようなものだともいえるわけです。だから、彼らは、塾に通うだけで充分にやっているような気持ちになってしまい、それ以上のことをやろうとはなかなかしません。ちなみに、大人だってアフター5はビールでも飲みに行きたいところでしょう。子どもたちはよくやっているともいえるわけです。よく鈴木国語のしごきに耐えていると思います。

また、よく「目標をしっかり持ってそれに向かって頑張ろう」というようなことが言われますが、彼らの多くは「はっきりとした大きな目標」を持ったことがない、という点にも注意が必要です。目標を持つことができるのは、目標をもって成功したり失敗したりした経験がある人間のみであり、彼らは目標という言葉やそのイメージは何となく持っていて、今一つそれに対する実感が持てないのです。

さらに、彼らの脳は、子どもの脳から大人の脳へ成長する過渡期にあり、ようやく抽象的思考力や論理力を獲得しつつあるといえます。初めからそのようなものを持っているわけではなく、6年生の受験期を経験することで、初めてそのようなものを獲得するのだといえます。

成績が伸びないように見えたり、やる気がないように見えたりする原因の中心は、これらの肉体的・精神的能力の限界にあります。

では、そのような彼らに、どのようにして中学受験を乗り越えさせるのか、ということが問題となります。

これには、勉強量と勉強内容の調整、勉強習慣、生活習慣の合理性を目指した管理、あせらず大きな目で見守る態度、などの大人によるマネジメントが必要です。これらはすべて連動します。

勉強量と勉強内容の調整については、無駄な宿題などは一切カットして彼らの負担を減らすことが大切です。たとえば、国語の予習は無意味です。文法などもほとんど入試に出ないという意味で、意味はありません。きちんと理解しているものをきちんと復習する。漢字の勉強を短時間で繰り返す、というような意味のあることを積み重ねるべきです。これは勉強の習慣づけの問題でもあります。ちなみに、「国語は一回勉強すれば、それで答えはわかっているから、もう復習の必要はない」というような俗見が広くいきわたっていますが、まったくの間違いです。現に、今きわめていいに解説した問題ですら、やり直してみると、その答えを正確に再現できる生徒はほとんどいないということです。読解・記述は一種の技術ですから、ピアノの練習のように幾度も幾度も繰り返さなければ身にはつかないのです。「バットの降り方はこうです。」「ハイ、1回降りました。これで十分に分かりました。」こんなことがあり得ますか？ 「わかったと思うこと（自己満足）」と「分っている」ことはまったく違うことです。「分っていない」ということを分かることが大切なのです。

たとえば、算数についても、計算力も中途半端なのに、難しい問題を解くことばかりをしている、しかも、解くだけで、しっかり自分のものにしていない（体得していない）というような勉強はダメです。計算練習は漢字練習と同じように繰り返すべきです。そのうえで、応用問題なども、ある程度の時間間隔で無数回繰り返して自然に解けるというレベルに持っていくべきです。試験時間内に、三倍の量の問題を一気に解くという練習も有効ですが、今の無数回繰り返しによる基礎トレが前提となって可能となります。できない生徒の場合には、受験ギリギリまでかかりますが、きちんとやれば受験本番で伸びます。

例えば、理社の場合、基本的知識の習得は、漢字練習と同じことです。漢字を10分で100問練習できる人間は、10分で理社の基本知識を100個回すことができます。この基礎の上に立って、初めて応用発展問題に取り組むことができ、それを生かすことができます。

このような勉強量と勉強内容の調節は、勉強習慣をつけさせることでもあります。塾という他力に依存しようとするから、勉強習慣がつかないとも言えます。宿題をただこなしても勉強習慣はつかないということです。自発的にやるという要素がどうしても必要です。その要素があって初めて真の勉強習慣であるといえます。自発的要素を欠けば、その勉強は単なる惰性にすぎません。

こういう観点から、塾通いも含めて、生活習慣を見直し、睡眠など十分に確保できるように生活を組み立てる必要があります。睡眠を削って勉強するのではなく、10分に100問というような集中的な勉強をするために、睡眠などをきちんと確保した生活習慣を作るのです。また、10分に100問というような集中的な勉強をすることで、睡眠時間などを充分にとるのです。

こうして、肉体的・精神的に未熟な彼らを受験ギリギリまで合理的に導いていくことで、彼ら自身も本番前の緊迫感の中で、受験スイッチが入るようになります。すると、爆発的な力を発揮して、偏差値20くらいは飛び越えた合格をします。ビッグバンです。潜在的には蓄積されているが、可視化できないエネルギーが爆発するのです。

ちなみに、偏差値による評価とは何でしょうか？ それはあくまで、その時における試験結果を、平均値を基準にして、どの程度の位置にいるかを数値的に示したものであり、一つ参考資料に過ぎないということです。力が落ちてきている生徒も力をつけつつある生徒よりも良い偏差値をとることはあるわけです。しかし、本番の試験で受かるのは後者であって前者ではありません。ある時点の偏差値によって個人の可否が判定できるものではありません。もちろん、大量的に観察すれば、偏差値の良い生徒がたくさん受かっています。これは多くの人が、他人と同じ行動をするために、他人と同じ成果しか上げられないためだと思います。つまり、成績が悪い生徒は成績が悪いまま、中くらいの生徒は中くらいのまま、成績の良い生徒はその成績のよさのままで行くため、こういう結果になるのです。しかし、多くの生徒が合格のためには成績を上げなければならない（力を付けなければならない）生徒であるわけです。したがって、そういう生徒が、できる生徒と同じことをしては、できる生徒に勝てるはずありません。上に述べたように、知識の確実化、思考方法の確実化、繰り返す習慣、という最も基本的なところをトレーニングすべきであり、そのために勉強対象の量も絞るべきなのです。そういうきめ細かいマネジメントによって子どもたちを受験に導くべきであり、ただ「頑張れ！」とか、「根性を出せ！」とかいうだけの無策は、何の成果も生み出さないというべきです。

また、成績の安定とは何でしょうか。そんなことは幻想にすぎません。白鳳のような稀に見る実力の持ち主でも永遠の連勝記録など臨めるものではありません。大坂なおみはウインブルドンの初戦で敗退しています。成績の安定ではなく、本番で勝つための試行錯誤・工夫・潜在的な力の積み重ねが大切なのです。その過程では、成績が上下に変動することなど当然にあります。そういう経験をしながら、本番の試験に向けて力をつけていくことを考えるべきです。もともと成績の悪い人間が一朝一夕に成績が伸びるはずはありません。問題はそれをどうするかであるのに、その問題を地道に解決しようとしなくて、結果ばかりを求めるのはおかしくはありませんか。受験は宝くじに当選するのとは違います。宝くじなど当たりません。受験なら落ちるだけです。織田信長が3000の兵力で、30000の今川軍を破った話は有名ですが、自分が弱小であれば、人と同じことをしようとするのではなく、人と違うことをしようとしなければなりません。

「四教科のバランス」などということが言われますが、それぞれの科目がみんなできることが大切だけではないのですか？ 科目相互間にどんなバランスが必要だということでしょうか？ 算数の偏差値が50なら、現在60の他の科目も、算数とのバランスですべて50にしましょうということでしょうか？ 算数が苦手なので、算数にかける時間を増やすというのなら、それは算数ができるようにするために、勉強時間の配分を見直す、というべきでしょう。この場合、むしろ時間配分の観点からはアンバランスというべきでしょう。受験の世界では、政治の世界やサプリメントや育毛剤の世界と同じように、よく考えてみると意味不明の言葉が使われ、みんながそれに唱和していますが、本当にご自分お子さんのことを考えるのなら、そのお子さんの個性との関係で、そのご家庭独自のやり方を考案すべきではないのですか？ ただ四教科の塾に漫然と通っているというのはあまりにも無策でしょう。

「語彙が足りないので読解力がありません」という方が多々いらっしゃいますが、「語彙」は勉強の過程でついていくものであり、ア priori に持っているわけではありません。さらに、語彙は単なる知識ではなく、文脈推理力という思考力の面があります。その思考力は読解記述の練習によって身につくものであり、初めから持っているものではありません。それに、「語彙が足りない、語彙が足りない」といいながら、漢字の熟語をしっかりと覚えさせようとしなくてはどういうことでしょうか？ 語彙の一番基本だと思いますよ。同音異義語の区別、同訓異義語の区別、反対語、同類語、四字熟語…これらはすべて「語彙」ではないのですか？ また読解の復習をきちんとやれば、その文章の中には無数の語彙が含まれているのではないですか？ 中学英語というのがあります。ここでは「私=I」「食べる=eat」「りんご=an apple」という単語を知っていれば、「I eat an apple.」の意味も分かるし、「I eat an apple.」と作文もできます。これはピアノで言えば、「ドはこの鍵盤」「ミはこの鍵盤」「ソはこの鍵盤」と覚えて、一本指で弾くようなものです。当然、この発想を中学入試レベルの国語の文章に適用しようというのは間違いです。中学入試の文章は長大で内容もかなり高度なものです。ここでは大きな流れの中での的確に部分部分の意味と全体の意味をとらえることが求められます。いわばピアノで大きな曲を弾くようなものです。そのような読解のための語彙をつけようとするなら、上に述べたように、学んだそれぞれの文章を本当に自分のものにしてしまうくらいの復習をするべきです。そうして、そこから吸い上げるような形で語彙を増やすべきです。また、そのような繰り返しによって、同時に文脈推理力を鍛えるトレーニングをするべきなのです。もちろん、漢字などを、例文を通して意味を知り（これも文脈推理力）、ほとんど無意識的に早く正確に書けるようにすることも必要です。